

教科主張

国語科の本質

「言葉」は、使い手の映し鏡である。なぜなら、その人の内界から生み出され、選び取り、外界へ発信するそのプロセスは個人特有のものであるからだ。また、同じ言葉を見つめても、言葉の印象や捉えは共通の定義として存在する一定の範囲の中で個人の想像に委ねられているのである。他者とのコミュニティの中で生活する私たちにとって「言葉」は、「よりよく生きる」ために生み出された欠かせないものであり、即ち、その「言葉の力」によって私たちは世界とつながっている。つまり国語科という教科は、子どもの「言葉の力」を磨くことによって、その使い手自身を磨いているのである。

子どもは自身を取り巻く環境と関わることで「自分の思いを分かってほしい」「みんなのことを分かりたい」「周りのことを知りたい」といった思いを抱く。そうしてその子の中に自身の言葉に対する願いを芽吹かせる。そうした願いをもって言葉に出合った子どもは「言葉による見方・考え方」を発揮し、自らの言葉を使って考えを言語化していく。その子の内から紡ぎ出された考え（以後「解釈」）には、その子らしさが映し出されている。そして、その解釈を他者と語り合うことで、「言葉による見方・考え方」を広げながら解釈し直し、言葉の概念を広げたり確かにしたりすることで言語感覚を磨いていく。

国語科における学びの営み、即ち、言葉と出会い、解釈し、他者と語り合い、言語感覚を磨くというサイクルをくり返すことは、子どもの「言葉の力」を培うとともに、自分らしさを磨いていく。小学校段階でこうした経験を積み重ねることは、生涯にわたって自分らしさで彩られた豊かな人生を創生していくための確かな基盤となり、これこそまさに国語科の本質だと考えている。

国語科の考える『その子らしく学ぶ』とは～人間性の涵養につながる経験～

私たち国語科部は、「その子らしさ」には「ものの見方」が包含されていると考えている。「ものの見方」は内面にある背景知識や価値観、感性・情緒などと

その子のもつ言葉が結びつくことでかたちづくられ、立場や状況など、外的な要素である周りの環境による影響も受ける。

子どもは解釈の対象となる言葉と出会うと、自らの「ものの見方」を通して、共感や違和感から自分の思いをもち、表したくなる。言葉に対し自分なりに解釈した子どもは、他者と交流する中で、他者の解釈との間に生じた重なりで共感したり、ズレに違和感を抱いたりする。そして、他者にその根拠を聞くことで、その言葉をどのように解釈したのかを理解しようと捉え直す。その際、子どもは、言葉を介して他者の「ものの見方」を感じたり、受け止めたりしながら、「言葉による見方・考え方」を広げていく。このように子どもは、自身の言葉に対する願いをもち、「言葉による見方・考え方」を発揮しながらその子の「ものの見方」で言葉を解釈していく。

さらに、授業という営みの中で「言葉による見方・考え方」を働かせる対象と出合った子どもは、自身の感覚と言語化能力のギャップから切実な「学習目的」を創出する。この内発的な目的を達成するために、子どもは独自のプロセスを辿りながら自律的に学びを進めたいと願う。その子ならではの学びが保障された空間では、子どもは自走する学びを展開し、その先で自身の到達点や学び進めてきたプロセスの是非を確かめたいという欲求を自然と抱くようになる。その際行われる他者との関わりは、自身の学習プロセスや成果を客観的に捉え、価値付けるための重要な参照点として機能する。それは、単なる解釈の交流を超え、互いの位置関係を確認し、それぞれの学びをメタ認知的に価値付ける高度な活動へとつながっていく。

このように自ら試行錯誤しながら歩んだ過程と、そこで得た知とが一体となってこそ、真の「学び」といえるだろう。それは一過性のものではなく、日常生活や未来のあらゆる場面でその人を支える礎となるはずである。自らを肯定し、生きた学びを重ねていく営みは、未来における可能性を広げ、困難を乗り越える力となる。それは、その人をその人たらしめる「個性」をかたちづくっていくことにつながり、こうした姿を『その子らしく学ぶ』姿と考えている。